

近世琉球における被葬認識の変化

—祖先をどう祀るか—

山田浩世（沖縄県教育庁文化財課・主任）

【やまだ こうせい】1982年京都府出身。専門は琉球史。2011年に琉球大学人文社会科学部研究科（後期博士課程）修了。日本学術振興会特別研究員PD等を経て現職。

主に琉球国の国内制度史および中国・日本との交流史、琉球災害史について研究を行う。主な論文に「琉球における社会危機と復興 -19世紀前半の「上からの村落立て直し」と褒賞-」『気候変動から読みなおす日本史（6）近世の列島を俯瞰する -南から北へ』（臨川書店、2020年）、「近世琉球における王府組織の編成と運営」『日本歴史』841号（吉川弘文館、2018年）などがある。



今日は、近世琉球という時代に、墓へどのように人々が祀られてきたのか、関係する制度や、当時の時代の墓をめぐる枠組み、その変遷といったものをいくつかの事例を交えながら考えてみたいと思います。

私は、先に講演のありました鈴木さんと同じく歴史学、古文書を中心とした研究をしています。普段は沖縄県教育委員会にある文化財課というところで沖縄の歴史に関する本の編纂などの仕事をさせていただいております。

さて、近世琉球の時代における被葬認識と題しましたが、これは葬る人の考え方がどのように変化してきたのかを考えてみたいということです。今日は「葬墓制からみる」ということで、お墓と人の問題ということになるかと思っています。基本的にお墓は亡くなった方のためと考えがちですが、亡くなった方は自分を自分で葬ることはできませんので、逆説的にはお墓とは亡くなった人を生きている人々がどのように葬るかという問題であるとも言えます。実は、死者の葬られ方を見ていくという問題は、当時、生きていた人たちの世界を見ていくということでもあります。生きている人たちが、亡くなった人を葬り祀るための空間という視点からお墓を見てみるとどのように見えるのかということが、被葬認識という問題になるのではないかと考えています。葬るという行為は、当時を生きた人たちの価値観や、当時の社会のあり

ようを映す鏡ではないかと思っています。

近世琉球という時代に祖先をどう祀ってきたのかという問題を考えるにあたって、今日は3つのパートに分けてお話できればと思います。最初に、被葬認識の変化という問題についてです。これまでもさまざまな研究者が同じような視点からアプローチしてきておりますので、まずはこれまでの代表的な研究成果を紹介し、どのようなことが分かっているのかを見てみたいと思います。

次に、亡くなった人をどう葬るのかという問題を具体的な事例、特に麻姓田名家というお家の事例から、墓室内をどのように使用していたのかについてみていきたいと思っています。実は、墓室内に置かれた厨子の配置は常に一定ではなく変化していました。

次に、どこを祀るかという問題についても、貝姓福地家というお家の事例から、祭礼、祀り方の変化について見てみたいと思っています。

今日はいろいろな分野の先生方がお話をされるというところからも分かるかと思いますが、葬墓制を考えることはとても学際的な内容かと思いません。例えば、お墓の中をどう利用しているのかという問題については、お墓の形や墓室内の構造の変化といった、最初に宮城さんがお話しされたような考古学の成果というものがあります。また、墓にどのように葬るのか、祀るのかという問題については、葬る単位である家や門中にとっての祭

祀の問題など、民俗学や人類学の成果というのが非常に分厚く存在します。ですので、今日、私の方からお話する内容もいろいろな分野からの視点で見えていくとまた新たな知見が得られるのではないかと考えております。議論を重ねていければと思います。

先行研究に見る被葬認識の変化

では、具体的な話に入っていきたいと思います。亡くなった方を葬るという考え方（被葬認識）が、どのように変わってきたのかについて、先ほど鈴木さんからも、身分制であるとか、家譜や位牌との関係などについてお話がありました。それらの内容も含め、基本的な研究水準を示すものとして1989年に出版された『南島の墓』という本があります。この中で私の報告する内容に引きつけると、田名真之さんの「士族の墓」という報告が収録されており、墓室内がどのように利用されたのかという問題にアプローチした論文があります。家譜の編纂によって、自分の家系にはどのような人たちがいて、どうつながってきたのかということが把握されるようになりました。このことによって、墓に葬られた人を、これは誰で、あれは誰かというように把握していく、特定していこうとする時代が始まったことが述べられています。系図を編纂する中でこれは誰のおじいさんだよとか、お母さんだよということが大事になっていったわけです。

もう一つは系図を作ったことで、血筋、血のつながりというものが強く意識されるようになりました。これも先ほど鈴木さんがお話しされていたところで、お墓にとって大きな転換点だったわけです。17世紀後半から18世紀初頭にかけて、その観念がより強く意識されるようになります。葬った死者で墓がいっぱいになり同時代では使われなくなったお墓を神御墓と呼び、逆に現在使っているお墓のことを当世墓と呼ぶかと思えます。これら現用の墓と閉じられた墓というのが徐々に出てくる時代が17世紀後半で、これらの墓をどのように整理し把握していくのか、葬る人の認識の変化とともに考える時代となっていきました。

また、もう一つ重要な研究として福地有希さんの研究があります。首里にある玉陵（玉御殿）と

いう国王や王族が祀られたお墓の分析から、使用方法が変化していたことが論じられています。玉陵の中にある人々の情報については、銘書や陶札などいろいろな形の記録があり、さらに『王代記』という王家に関する家譜のような記録があります。福地さんの研究は、これらの史料から移葬とか移骨という現象がどのように起こっていたのかを分析したもので、墓にいる人々が変化していったことを明らかにしています。そもそも首里玉陵は、1501年の段階で「たまおとんのひもん」に書かれているように、誰が墓に入るのかを決められたお墓でした。血縁を中心に定義されていますが、これが徐々に各時代の王、代々の王が入るお墓という王統を意識したお墓として定着していきます。

近世の段階、すなわち乾隆16年（1751）ごろになると、妃や継妃などの国王の奥さんは、玉陵に葬られるべきであるとされていきました。夫婦は同じ墓に入らなければならないという認識が広がってきたことが背景にあり、あちこちに葬られていた王妃たちが集められ、あらためて玉陵に葬られました。

また、乾隆24年（1759）には王族とされる人たちがどこに葬られているのかを当時の王府は徹底的に調査しはじめます。調べてみると46カ所にもわたって葬られており、この中で、どの人を玉陵に入れないといけないのかといったことが議論され、移葬が行われていきました。葬られるべき場所という新しい考え方が墓の利用に影響し整理されていったわけです。

他にも1759年以降は、早くに亡くなった王子や王女についても整理が行われ、移葬が行われていきました。玉陵や関連する王族のお墓の中では、さまざまな変遷があったわけです。同様に王家で言えば王とのつながり（王統）が重視されたように、一般の家では男系中心の家の連続性（家統）が重視されるようになりました。当時の一般的な民衆の考え方、または国のあり方を記した『御教条』という文書にも、夫婦の重要性が説かれています。一族が秩序をもって繋がっていくことを重視する儒学的な思考の影響とも考えられていますが、家や門中という単位で各人が把握される時代を迎え、その変化はお墓の利用方法と密接に結びついていました。

最近の研究では、安里進さんによる人口問題との関係も議論されています。近世に入り琉球の人口が急激に増えると、彼らを葬るお墓についても影響があったのではないかという視点です。現代は人口が増えない減少の時代ですが、17世紀後半から18世紀前半という時代は人口が爆発的に増えていました。人が増えると、結果亡くなる人も増えますので、葬る場所や葬り方にも影響があったというわけです。特に那覇とか首里などの町方は急激な人口増加を経験し、この問題がより顕著に現れたと考えられています。また、この時期は先ほど述べた家譜編纂の時代でもありますので、家の連続性が意識される中でお墓というのが大事になっていきました。この後お話しする18世紀中頃までの時代とは、人々のつながりが変化し、過去の人たちと自分たちの関係をどのように整理するのか、理念的な整理が求められていくようになっていったと思われます。

麻姓田名家から見る墓室利用

では具体的に、先ほど紹介した麻姓の事例を見てみたいと思います。『田名家文書』というものを使用しますが、麻姓という一族の中に田名家という家があり、古琉球の段階からの記録が残ってい

る有名な家文書の一つになります。現在は沖縄県立博物館・美術館に収蔵されています。麻姓の一族の方で、渡口真清さんという郷土史家、研究者がおられまして、自らの家系でもあり優れた研究者でもありますので、祖先の問題を非常に細かく、しっかりと研究をされました。『麻姓墳墓誌』とか、『麻氏先塋志』といった本が自費出版されておりま。この中で史料を用いてお墓がどのように使われてきたのかを解説しています。部外者ではなかなか分からない言い伝えなども用いられています。

その中で麻氏のお墓については、大きく言えば三つのお墓が問題になっており、稲福のお墓、御三方御墓、垣花のお墓というのがありました。稲福御墓は初代で、大城按司という人物を祀っているとされています。御三方というのは、その次の世代、すなわち2代目の人々のことで、田名家は非常に長い歴史を持っていますので、一族の最初の人々については古すぎてほとんど記録がありません。どこに骨があるのかが分からなくなりました。また、その後もさまざま場所にお墓が作られました。

大きな問題になったのは、三番目の住吉の杜、儀間にあった「垣花の墓」と呼ばれているものです。ここには3代目から11代目が安置されていま

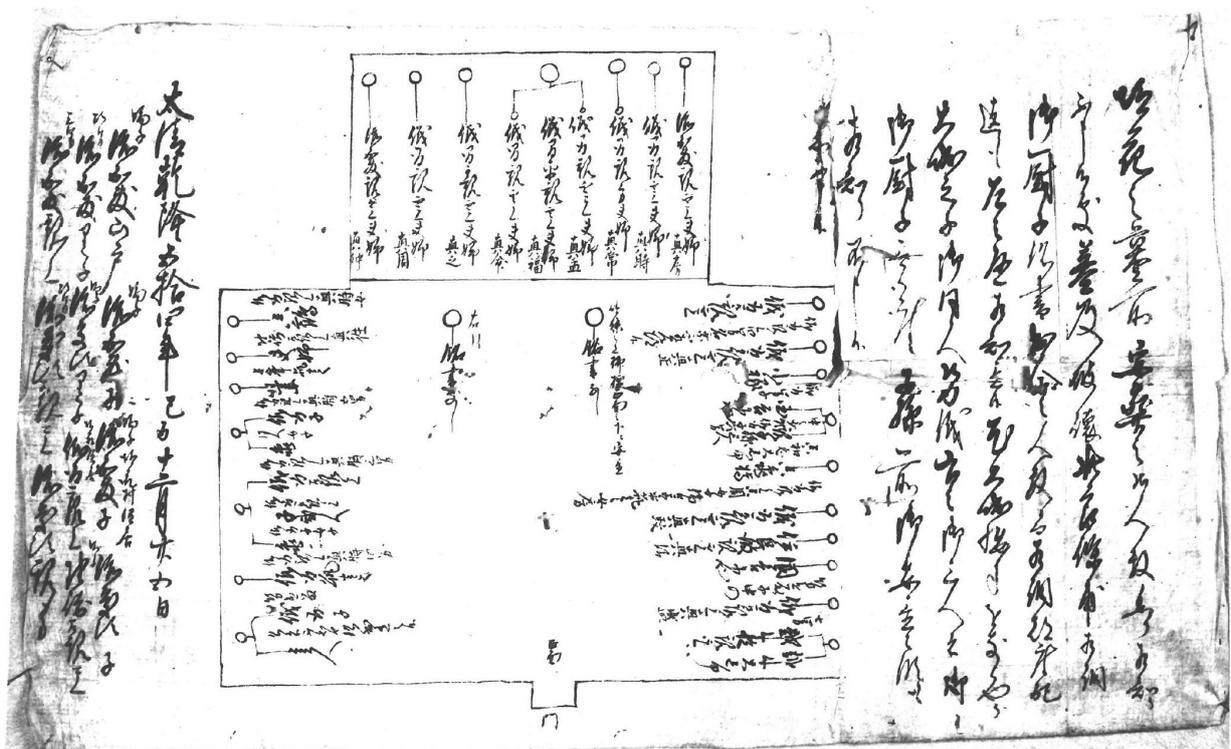


図1 「垣花之墓所安葬之御人数覚」(沖縄県立博物館・美術館所蔵)

した。お墓は、残念ながら沖縄戦によって全壊し、今は残っていません。このお墓は乾隆54年(1789)頃にはすでに同時代としては使われなくなっており、神御墓となっていました。

田名家文書の中に「垣花之墓所安葬之御人数覚」(沖縄県立博物館・美術館所蔵)という史料【図1】が残っており、見てみると所狭しと墓室内に文字が書かれています。小さい文字が細かく書かれています。まず史料の両サイドに「垣花之墓所」という所に葬られている人たちは、どういった人たちであるのかということが書かれています。

史料には、「垣花之墓所安葬之御人数委ク相知り不申候処、墓及破壊、此節修補相調、御厨子銘書書合之人数ニ而相調部、座配違も左之通相知置候、尤大城按司をなしやら・大城之子・御同人御内儀、右之御三人者御厨子無御座、子孫前御安置之段も相知り不申候」(垣花の墓に安葬している人達は詳しく分からなかったが、墓が壊れ、今回修理をしたので、厨子に銘書が書かれている人達を調べ、配置なども左のように分かった(とした)。なお、大城按司をなしやら・大城之子・同妻の三人は厨子はなかった。子孫たち(我々)も安置先は知らなかった(分からなかった。))とあります。

垣花の墓に安葬している人達について詳しく分からなかったが、墓が壊れたので今回つまり大清乾隆54年(1789年)に修理をした際に、厨子に銘書が書かれていない人達を調べ、配置なども左のようにしたということが書かれています。

【図1】内にある丸は厨子になります。なお、大城按司(をなちやら)、これは初代です。大城之子は、2代目で、その妻も含め3人については、骨がないとあります。子孫たちも調べてみたが安置先は分からなかったとあります。最後に署名が加えられており、彼らはちょうど14世代目、第16代の当主である真幸と呼ばれる人物の時代であることが分かります。真幸は、渡慶次親方とも称し、王府の高官でした。墓の損壊に合わせ門中合同で内部を調査した際の記録であることが分かります。

墓室内の人物について並べてみると、まず一番上の棚に11代までの当主、初代と2代目はおりませんので、一番真ん中の丸が3代、その後4、5、6、7代と続き、偶数が図の右側に、奇数が左側

に配置されています。これらは昭穆という関係で並んでいます。そして、それぞれ夫婦で入っているというふうに記されています。彼らは墓口から入って正面に並べられていました。

次に墓の左側の棚に、12世代目の人が1人いますが概ね第9世代目の人たちが並びます。そして右側の棚には10世代目の人たちが並んで整理されています。非常に規則的に配置されていて、正面が各代の当主、左側に9世代目、右側に10世代目という並びになります。3から11世代目が系図、系譜関係に準じて理念的に配置されています。興味深いのは、図の真ん中に銘書のない厨子がおかれ、これらについて「吟味之上佛壇正面之下ニ安置」したと小書きされています。銘のない厨子二つについて、詳細が分からないので正面の下の方に置いたと書かれています。また、墓室正面の棚、3代から11代までが並んでいる場所を「仏壇」と呼んでいます。墓室内の棚を仏壇に見立て、厨子を配置したことが見てとれます。お墓の中にある棚を仏壇というふうに表現した史料は管見の限りここでしか見たことがありませんが、このことから棚を仏壇と認識していることが分かります。

もう一つ、「垣花之墓所安葬之人数」(沖縄県立博物館・美術館所蔵)というメモ書のような史料があります。全文の翻刻は以下のとおり。

垣花之墓所安葬之御人数

大城按司

をなちやら

大城之子

御内儀

但、御厨子無御座子孫前ニ御安置之段相知不申候、

大城之子

但、御骨無御座候伝聞申候、

厨子壺ツ安置

儀間筑登之親雲上真福

平良大あもしられ

儀間親雲上真孟

御同人

御内儀

儀間親雲上真命

御同人

御内儀

右同

- 儀間親雲上真常
- 御同人
- 御内室

右同

- 儀間里之子親雲上真之
- 御同人
- 御内儀

右同

- 儀間親雲上真時
- 御同人
- 御内儀

右同

- 儀間親雲上真周
- 御同人
- 御内儀

右同

- 渡嘉敷親雲上真房
- 御同人
- 御内儀

右同

- 渡嘉敷親雲上真仲

是迄上壇

- 御内儀

儀間親雲上四男名乗不相見得候
儀間筑登之親雲上
儀間里之子親雲上真正
儀間男子
小祿
真和志うふせを

- 親子孫三人

申ノ亥順

- 儀間之次男
- 国吉にや

儀間親雲上真周女子橋口宮平筑登之女房
真龜樽
儀間筑登之親雲上真政
伊良波親雲上真清

右同

- 勢遣富し
- 勢遣富子
- 仲之
- 国吉にや

右人数左

銘書なし

厨子式つ

二つ正面

儀間親雲上真時女子

真鶴

野崎筑登之親雲上真往

夫婦

長峯筑登之七世真之女

妻

儀間親雲上真時五男

- 儀間子
- 同人女子
- 龜

儀間親雲上真時三男

- 儀間筑登之親雲上
- 儀間筑登之親雲上
- 子式人
- 儀間子
- 龜

儀間親雲上真時四男

儀間筑登之

□□□

- 勢遣富儀間子
- 右同名乗不知也銘書有之候
- 壺人

以上

右通御厨子銘書調部方如斯御座候、

以上

乙酉十一月二日

此三人左

- 越来大しゆ
- 越来掟親雲上
- 七男
- 儀間里之子親雲上真盛

こういった人たちが墓室内にいるのかについてメモ書のような形で記録されています。最初は、厨子がなく子孫たちも詳細を知らないという、初代や2代目についての記載があり、大城の子どもの骨はないとの口伝があるとのメモもあります。3、4、5代は一つの厨子に安置しており、6、7、

8、9、10、11世と名乗などを記しています。真仲の後に「是迄上壇」（ここまで上段）と書いています。

続いて、10世、8世の人たちが書かれおり、最後にこの人たちは左（側）と書かれています。これは、つまり左側、今まで読んできたところの10世、8世の人たちは、お墓の中の左側に置いたという意味だと考えられます。墓室内中央に置かれた銘のない厨子二つについて位置を「正面」としています。さらに次は左側に置かれる9世の人物が続いていきます。

最後に、銘書を調べた結果であることを記し、乙酉11月2日、すなわち1789年のことであると日付を記しています。この日付からみて、墓室を改修した後に記した【図1】の史料作成の2カ月前に作られたことが分かります。特に興味深いのは、日付の後に「此三人左」と書いて、越来大主、越来掟親雲上、儀間里之子親雲上真盛の名があります。記載から見てこの人たちは、日付の書かれた後に墓室内左側に置くことが決められたと思われる。この3人は後でどこに入れるべきかとなって、10世につらなる人たちですので、左側に置くべきとして書き加えられたのではないかと考えられます。

墓を改修した当時は、14世の人たちの時代ですので、約3世代前ぐらいの人たちで、彼らからするとやや遠い祖先ということになります。麻氏というのは、非常に繁栄し、優秀な官僚を輩出して、那覇から首里へと移住していった人たちも現れました。そういった中で麻氏の祖先達の葬り方というのが議論され、神御墓であった墓室内の配置を秩序立った形で整理したのではないかと思います。

古い祖先が入っているお墓の中を、この文書のように整理していくということがよく見える資料ではないかと思います。また、夫婦を同じ厨子に合葬しようとしていることや、家がどうつながってきたかということが分かる形で厨子が並べられ、世代を軸に整理されていました。厨子が、仏壇の位牌のように配置されている点も興味深いかと思います。お墓の中の厨子や骨を位牌に見立て、墓室の中の棚を仏壇とし、位牌祭祀の空間が意識されているように見えます。

一方で実際に仏壇を備え位牌祭祀も行っていると考えられますので、実は骨と位牌という二つの形を通して亡くなった方々を拜んでいるとも言えます。厨子も骨壺ですが位牌と同じように亡くなった方の棺がモチーフとなっています。亡くなった人間は魂と魄に分かれ、一つは天上に一つは地下に行くと考えられていました。お香を立てるなどして魂魄が位牌に呼び出され、先祖に会え、お祈りするという魂魄という中国的な思考と、骨に魂が宿ると考える琉球的な感覚、これが位牌とお墓という重層的な形で葬ることに繋がっているのではないかと思います。アジア的でもあるし琉球的でもあることが理解できるのかなと考えています。

貝姓福地家と祭礼の規定化

次に貝姓福地家の事例について紹介したいと思います。

貝姓福地家の文書は、那覇市経済文化部歴史資料室編『那覇市史 資料篇1巻9近世那覇関係資料』（那覇市役所、1998）に所収され、その中に「貝姓規模帳」という、19世紀後半に祭礼について記した文書があります。

この文書内には、同治9年（1870）2月に門中によって作成された「定」があり、次のような記載があります。

「一、我等大宗御札本者首里内汀志良次村ニ而候処、中比先祖新川子御代ニ者御家内被及御困窮、首里之御素立難被成候半、御姉御一同若狭町村江御住居其御孫唯元公御代ニ御朱印系図被下置候、此趣者左条ニ有之候伝承書ニ委細相見得候、右通往古之事ニ而大宗之氏名御墓所等曾而不相分事候処、近來時よた之虚説ニ迷ひ上泊後表まあちゆと申処ニ有之候古墓を大宗御安置之御墓所と申、清明之節々門中思ひ々々ニ参詣仕候、何之証拠・証跡も無之墓所右通致参詣候儀、何共不徳勿論後來之故障も難計事ニ而、此節吟味之上右墓所参詣者取止、向後御三味式組門中模合ニ而先繰を以相調、清明之入日九ツ時分盛前所江相揃、正統於墓所壺組者大宗表江之心当、壺組者御安置之先祖江祭上候筋致議定置候事」（筆者下線加筆）

冒頭にあるとおり、貝姓はもともと元祖が首里の汀志良次村の出身で、一時期、経済的に困窮し

首里での生活がままならなくなったことから、みなで那覇の若狭町村へ移り住み、その後、唯元の時代に系図作成を許可されて士族となったという家系です。

大宗（元祖）の墓所については、昔のことで不明だったところ、ユタの「虚説」を信じて上泊の後方にある「まあちゆ」という所にある古墓が元祖の葬られているところであると言われ、清明の際に門中内では参詣するものもいたとあります。これが「虚説」であるのかは分かりませんが、貝姓規模帳の作成者の視点を見ると、「何之証拠・証跡も無之」「何共不徳勿論後来之故障も難計事」と、まったく根拠がなく、はっきりとしない場所への参詣というのは不徳の行為であり、（門中にとって）将来の懸案にもなるのではないかと問題視していることが分かります。

結果、その中で強調されるのは、今後は「正統」な墓所への祭礼を門中摸合で協力して行っていくことに集約され、一族間での親睦と結束が図られていました。どの墓所を拝むのかという問題を通じて正統性が示され、親族間の融和を拝所の統一という形で果たそうとするなど、同時代を生きた人々の墓をめぐる認識をうかがうことができます。

何が正統か、何を拝むべきかということを、さまざまな理由や背景を通じて考えていく中に、今、私たちが知ることのできる近世の時代の葬墓制というのが展開していつているかと思います。葬墓制といっても確定した完全な型式があるわけではなく、変化しながらさまざまな選択が行われており、どのような形で人々と墓の関係が作られていったのか興味が尽きないところではないかと思います。

第43回南島文化市民講座

葬墓制からみる近世琉球社会
－祖先と子孫の対話－（報告集）

発行日 2022(令和4)年2月28日
編集 沖縄国際大学総合研究機構南島文化研究所
発行所 沖縄国際大学総合研究機構南島文化研究所
沖縄県宜野湾市宜野湾 2-6-1
TEL.098-893-7967
印刷所 有限会社サン印刷
沖縄県島尻郡南風原町兼城 577
TEL.098-889-3679
